

金沢大学の女性教員増加推進

—学生の教員に対するジェンダー意識をもとに—

研究者：谷川 貴子 法学部法政学科 4年

指導教員：高橋 涼子 人間社会研究域人間科学系 教授

1. 研究目的

近年、男女共同参画社会が推進され、女性の活躍の場は広がりつつある。しかし、大学の教員における女性の割合は依然低い。金沢大学も例外ではなく、教員に占める女性の割合は調査資料によれば13.4%と決して高くない(1)。女性の高学歴化は目まぐるしく、女性の研究者の数は少しずつ増えてはいる。だが、男性研究者と比べるとまだまだ少ないというのが現状だ。大学で学ぶ男女の比率はほぼ同じになろうとしている現在、女性教員の割合増加への対策を金沢大学の学生がもつ教員のジェンダーバランスに関する意識調査をもとに考えたい。

2. 女子学生の増加の歴史と背景

大学の教員になるためには大学を卒業し、大学院の修士課程そして博士課程を終えなければならない。そこで、まず女子学生の歴史を調べることにした。女性が大学に通うようになったのはごく最近のことである。それまでは「男子は四大、女子は短大」と言われるように女子教育を主に行っていたのは私立の短大であった。短大が女子教育を担った理由には主に次の4つが挙げられる。一つ目は「経済面」である。親が子供への教育を男子優先で行い、女子に対しては男子ほどに教育の負担をしなかった。二つ目は「学力面」である。戦前の教育制度において、同じ中等教育でありながら、女子教育機関では男子の教育機関に比べて外国語や理数系科目の教育程度が低く抑えられていたため、結果的に女子が学力不足であった。三つ目は1950～70年代は、20歳代前半がおおよそその結婚適齢期と考えられていたため、四年制大学に女子を通わせると“行き遅れ”になってしまうと危惧された。四つ目は男性が四年制大学出身であった場合、女性は一ランク下の学歴が好ましいという風潮である(2)。

1960年代に入るとこうした考え方が少しずつ弱まり徐々にではあるが四年制大学への女性の進学率は増加してきた。ここでも短大と同じく女子教育の担い手となったのは私立であった。これは私立大学の中でも、共学大学よりは女子大学の数の増加の方が著しいことが原因の一つである。また、1959年皇太子の結婚によってミッチーブームが起き、女子大学が人気となったためだとも言われている。専攻は「文学」に特化し、1969年には「人文科学」は女子の学生数が男子の学生数を上回った(3)。

平成21年度文部科学省のデータによると大学及び大学院の女子学生の総学生数に占める比率はともに過去最高となった。学部の学生数は252万7千人(前年度より7千人増加)で過去最高である。このうち女子は105万3千人(前年度より1万6千人増加)で過去最高となった。その占める比率は41.7%(前年度より0.6ポイント上昇)で同じく過去最高となった。また、大学院の学生数は26万4千人(前年度より1千人増加)で過去最高となり、このうち女子は8万1千人(前年度より5百人増加)で過去最高となった。その占める比率は30.5%(前年度より0.05ポイント上昇)でやはり過去最高となった(4)。

金沢大学では平成21年現在、学生数に占める女子学生の比率は学士課程で36.3%、大学院修士課程で21.3%、博士課程で27.0%であり、全国平均に近い比率である(5)。一方で先に見たように女性教員の比率は低い。このような環境で学生が教員のジェンダーバランスについてどのように感じているのかを調査することにした。

3. 研究調査と考察

①アンケート調査

学生のジェンダー意識について、生育環境や学校での教員の接し方に関する諸要因との関連で分析する研究は多いが、大学の教員のジェンダーバランス自体に焦点を当てて学生の意識を調査した先行研究は見当たらなかった。そこで次のような仮説を立て金沢大学生に対してアンケート調査を行うことにした。

【仮説】

- a. 教員の性別について学生が意識することはほとんどなく、女性教員が増加することに抵抗感を持つ人は少ない。
- b. アファーマティブアクションについては逆差別だという批判も多く反対する意見が多い。

【概要】

調査時期－2010年1月

対象－共通教育科目2つ及び文系学部の専門科目3つの授業を受講する学部学生604人

内訳－性別：男性399人(うち理系114人)、女性194人(うち理系23人)、不明11人

学年：1年－226人 2年－266人 3年－68人 4年－39人 不明－5人

質問は以下の通りである

Q1性別 Q2学部・学類 Q3学年

Q4履修する授業を決める時、教員の性別の違いを意識したことはありますか？

Q5金沢大学に入学してから男性教員と女性教員の授業をどれぐらいの比率で受けたことがありますか？

Q6ゼミや研究室を決める上で教員の性別を意識すると思いますか？または意識しましたか？

Q7男性教員と女性教員では授業における専門的知識の深さに違いがあると思いますか？

Q8男性教員と女性教員では授業中や授業後の質問のしやすさに違いを感じますか？

Q9次のような相談をするなら、どちらの性の教員の方が相談しやすいですか？

[研究や勉学上の悩み][学生生活上の悩み][就職や進路上の悩み]

Q10金沢大学での男性教員と女性教員の理想的な比率は？(選択肢から選んで回答)

Q11実際にあなたが所属する学部・学類の全教員の中で女性教員が占める割合はどれぐらいだと思いますか？

Q12今後、金沢大学で女性教員は増加したほうがいいと思いますか？

Q13大学の中には、教員を採用する際、男性と女性で能力が同じと判断された場合、女性を積極的に採用する「アファーマティブアクション」を実施しているところがあるが今後金沢大学で取り入れることについてどう思いますか？

Q14中学・高校・大学の中でジェンダーを扱った授業を受けたことがありますか？

以上の質問から得られたデータをPASW (SPSS) ソフトで分析をした。その結果、Q4～Q8では教員の男女の違いは意識されていなかった。以下では、統計的に有意な結果が出たデータを中心に分析を示していく。

<表1>

% (人)

【性別と学生生活の悩み】

Q9では、学生生活上の悩みの相談しやすさについて、表1に示されているとおりの女子学生の多くが「女性教員」または「どちらかといえば女性教員」を選択しており、男子学生の多くが「性別は関係ない」を選択している結果と大きな差が出た。一方、研究や勉学上の悩みと就職や進路上の悩みの相談のしやすさについては男女ともに「性別は関係ない」と選択している人が最も多いことから明らかに差がある結果と言える。

	女性教員	どちらかといえば女性	どちらかといえば男性	男性教員	関係ない	合計
男性	3.9	10.3	12.4	7.8	65.6	100.0 (387)
女性	27.6	36.5	0.0	0.5	35.4	100.0 (192)
合計	11.7	19.0	8.3	5.4	55.6	100.0 (579)

$\chi^2 = 165.033$ $P < .01$

<表2>

%(人)

【性別と女性教員の理想的な比率】

Q10では表2に示したように、「男性7割女性3割」、「男性5割女性5割」、「わからない」と答えた人がそれぞれ3分の1ずついた。男女別に見ると、男子学生は「わからない」を選んでいる学生が最も多いが女子学生は「男性5割女性5割」を選んでいる人が最も多い。

	女性1割	男性9割	女性3割	男性7割	女性5割	男性5割	女性7割	男性3割	女性9割	男性1割	その他	わからない	合計
男性	1.3	24.8	30.4	1.0	1.6	7.0	34.1	100					(387)
女性	2.6	27.6	35.0	0	1.0	5.2	28.1	100					(192)
合計	1.7	25.7	32.0	0.7	1.4	6.4	32.1	100					(579)

$\chi^2 = 7.032$ $P \geq .10$

<表3>

%(人)

【性別と女性教員増加への賛否】

Q12では「どちらともいえない」と答えた学生が男女共多かった。その結果が表3である。そこで、「どちらともいえない」を選択した学生を除いて分析をしてみた。すると、賛成派の男子学生が71.2%、反対派の男子学生が28.8%であった。また、賛成派の女子学生が84.1%、反対派の女子学生が15.9%となり、男女共に賛成派が反対派を大きく上回った。

	そう思う	思う	いえばそう	どちらか	いえない	どちらとも	思わない	いえばそう	どちらか	ない	そうは思わ	合計
男性	11.1	22.7	52.5	3.1	10.6	100						(387)
女性	12.0	34.9	44.3	2.6	6.3	100						(192)
合計	11.4	26.8	49.7	2.9	9.2	100						(577)

$\chi^2 = 11.651$ $P < .01$

【性別とアフーマティブアクション】

Q13では表4で示したように「どちらともいえない」と答えた学生が男女共多かった。しかし、表5に示したように「どちらともいえない」を選択した学生を除いた分析では、男子学生と女子学生で大きな差が出た。男子学生は推進賛成派が39.4%、推進反対派が60.6%であった。一方、女子学生は推進賛成派が79.5%、推進反対派が20.5%であった。この結果から、「どちらともいえない」以外を選択した学生のうち、男子学生の過半数は反対派であるが、女子学生の過半数は賛成派であるという明らかな男女の差が示された。

<表4>

%(人)

<表5>

%(人)

	き推進すべ	き推進すべ	どいえ	どいえ	い	もいえ	どいえ	きで	推	ど	き	推	合
男性	7.3	15.0	43.5	7.8	26.4	100.0							(386)
女性	13.0	21.4	56.8	3.6	5.2	100.0							(192)
合計	9.2	17.1	47.9	6.4	19.4	100.0							(578)

	賛成	推	反	推
男性	39.4	60.6		
女性	79.5	20.5		

$\chi^2 = 45.541$ $P < .01$

$\chi^2 = 6.179$ $P < .01$

②インタビュー調査

アンケートは文系学部の1、2年生の回答が中心だったので、あまり理系の学生、特に女性教員の数が文系学部より少ないと思われる理系の学部に所属する3、4年生の女子学生の意見というものが得られなかった。そこで、理系学部及び大学院の女子学生に協力していただきインタビュー調査を実施した。

【概要】

実施期間—2010年2月

対象—理系学部の女子学生6名、自然科学研究科の女子大学院生5名、計11人

Aさん=修士1年 Bさん=学部3年 Cさん=学部4年

Dさん=学部4年 Eさん=学部4年 Fさん=修士1年

Gさん=修士2年 Hさん=学部4年 Iさん=学部4年

Jさん=学部4年 Kさん=博士1年

対象学生に関しては理系の教員の協力を得て紹介していただいた。インタビューの方法は、1名もしくは2、3名の対象者と30分程度の時間を設け、質問事項にしたがって思ったことを自由に話していただいた。インタビューの内容は同意を得た上でICレコーダーとテープで録音し、インタビュー終了後に書き起こしをした。

以下、インタビュー調査で聞いた質問とその質問に対する回答がどのようなものであったかを示しておく。

Q1. 女性教員が少ないことを意識したことはありますか？

この質問に対して、Aさん・Bさん・Cさん・Eさん・Fさんは「意識したことはない」との回答だった。それ以外の学生は何らかの形で意識したことがあるとのことだった。その中でも代表的な意見を挙げておく。(下線は筆者による。以下同じ。)

Hさん：少ないなと思ってる。研究者を目指しているが女の先生にアドバイスをもらえない。

Iさん：研究室を考えるとときに女性教員のほうが言いたいことが言えるのではないかと考えた。女性教員がいると相談したいときに相談できる。

Jさん：調査のときとか長期になると女の先生がいると安心感がある。

Q2. 授業や研究の中で女性教員と男性教員の違いを感じたことはありますか？

Bさん・Dさん・Fさん・Jさんは「ない」と回答した。

Aさん・Cさん・Eさん・Iさんは「体力の差」をあげた。

Gさん：意識したことはないが、男性研究者の方のほうが頑固な気がする。こだわりを持っている。

Hさん：女の先生が少ないので違いを意識したことがない。意識できるほどいない。という意見もあった。

Q3. 所属している学部や研究科で女性教員が増加したほうが良いと思いますか？

(カッコ内は筆者が補充)

Dさん：(増えたほうが)いいと思う。悩み事の相談などはしやすくなる。大学の研究者を目指している人たちも多いのでそのモデルに。

Hさん：はい思います。モデルが欲しい。

Iさん：いないよりはいたほうがいい。

Kさん：はい。(増加したほうがよい。)

上記以外の学生は「どちらでもいい」との回答だった。しかし、その中でも次のJさんのような意見もあった。

Jさん：先生同士の議論を聞いていると男性では言わないようなところをついてきたりしているので、性別の違いか個人の違いかは分からないがもしそういう違いがあるなら活発な議論ができるのでいいと思う。

Q4. アファーマティブアクションについてどう思いますか？

この質問に対しては反対派が5名、賛成が5名、中立が1名と意見が分かれた。

反対派の意見は次のようなものである。

Aさん：男だったらいやだな。しかし、男性だらけの空間の中に行きたくないという理由でその道（理系学部への進学）をあきらめてしまう人がいるならいいかもしれない。

Eさん：性別によって絶対に変えられない能力というのはあって、その中で女性のこういう部分がほしいという明確な理由があるのであればやってもいいかも知れないが単に比率だけでというのには賛成できない。

Fさん：まったく同じということはないかなと思う。そこで大体同じなら女性というのは差別とまではいなくてもそんなことで判断していいのかなとは思う。

Gさん：不公平感が否めないと思う。その制度自体が差別のように感じる。

Jさん：どちらでもいいが、違和感を持つ。

賛成派の意見は次のようなものである。

Bさん：必要な制度だと思う。

Cさん：前例が増えるからいいと思う。

Dさん：とてもいいなと思う。

Hさん：採用して欲しい。私みたいに女性の研究者にいてほしいと感じている人もいると思う。女性教員が少なすぎる現状がある。

Kさん：賛成です。そういうシステムについて考えたことがある。逆差別になる問題があるが、女性のほうがデメリットが多いので、違うところで補うべき。アファーマティブアクションを公言していないと同じ能力なら男性をとるのだと思う。そういうバイアスがあってもいいと思う。

中立の意見は次のようなものである。

Iさん：どっちでもいい。男性に負けず認められたい。でも女性研究者が増えるのはいいこと。

Q5. 女性研究者を目指すうえで女性が少ない中で不安に思っていることや期待していることはあるか？

この質問は研究者を目指すHさんとKさんに回答していただいた。

Hさん：女性研究者を目指す学生のために支援があること。女性教員を増やそうとしているので、女子学生を支援する動きがあるのでチャンスだと思っている。

Kさん：（女性研究者が）いるにこしたことはないがいないからといって不安になることはない。（研究者になるまで研究を）続けられないかもしれないという不安はある。（女性研究者を目指す学生に対する）支援が少ないことが問題で、しかし女性教員を増やしている動きがあるので期待している。

どちらの学生も女子学生の支援や女性教員増加の動きに期待しているとのことであった。

③アンケート調査とインタビュー調査を通じて分かったこと

以上の調査から、次のことを結果として挙げておく。

女性教員が増加することに否定的な考えを持っている学生は少ないことがわかった。これは「今後、金沢大学で女性教員は増加したほうがいいと思いますか？」というアンケートのQ12に対して「そう思わない」または「どちらかと言えばそう思わない」を選んだ学生は合わせて11.2%しかいなかったことからうかがえる。また、インタビュー調査の方で、とりわけ増加してほしいと感じていない学生でも、増加すること自体は反対ではないという意見を聞いたことからもうかがえる。

また、教員の能力や適性は性別に関係ないと考える学生が多かった。これはアンケートのQ9で、「研究や勉学上の悩み」と「就職や進路上の悩み」の相談のしやすさに男性教員と女性教員とでは違いを感じるかという質問に対して、男女ともに「性別は関係ない」と選択してい

る人が最も多いことから推測される。図表では示していないがQ6「ゼミや研究室を決める上で教員の性別を意識すると思いますか？または、意識しましたか？」やQ7「男性教員と女性教員では授業における専門的知識の深さに違いがあると思いますか？」という質問に対して「思わない」を選択している学生が非常に多かったことからもうかがえる。一方、「学生生活上の悩み」について、女子学生の多くは「女性教員」または「どちらかと言えば女性教員」を選択していた。

以上のことから、仮説 a. 「教員の性別について学生が意識することはほとんどなく、女性教員が増加することに抵抗感を持つ人は少ない。」は、学生生活上の悩みに関する相談のしやすさを除いて確かめられた。一方、仮説 b. 「アフーマティブアクションについては逆差別だという批判も多く反対する意見が多い。」については、「どちらともいえない」という中立的な意見が約半数を占め、それ以外の学生では男女で賛否の傾向が異なる結果が得られ、必ずしもそのような状況ではないことが確かめられた。教員の能力や適性は性別に関係ないと確認した上で、女性教員を増やすことは女子学生にとって相談しやすい相手を作り、研究者を目指す学生にロールモデルを提供し、より良い勉学環境を提供できると考えられる。

4. 結論

①金沢大学への提案

最後に、この調査の結果を受けて、金沢大学の女性教員増加の対策を考えた。女性教員が増えることで、女子学生にとっては相談相手やロールモデルが増えるというメリットがあると同時に、男子学生にとっても多様な視点や価値観のある授業や研究環境を提供できるということをもっとアピールすべきである。そして、このような考えを打ち出した上でアフーマティブアクションを進めていくのが女性教員を増加させる有効な手段ではないかと考えた。

②今後の展開

女性教員が少ないという現状は金沢大学だけではなく、日本のほぼ全ての大学に当てはまる。先程示したデータの通り、日本の大学で学ぶ女子学生の数は平成 21 年度の文部科学省の調査で過去最高となった。おそらくこれからも大学で学ぶ女子学生の数は増加していくだろう。

この問題を日本の大学が抱える大きな問題と捉え、これからも研究を続けていきたい。

〈註〉

- (1) 金沢大学男女共同参画推進委員会編 『金沢大学 男女共同参画に関するアンケート調査集計結果』 2006 年 12 月 p. 114
<http://www2.adm.kanazawa-u.ac.jp/jinji/data/PDF/13Reference4.pdf> 2010/06/15 閲覧
- (2) 小山静子『戦後教育のジェンダー秩序』2009 年 勁草書房 p. 103 , p. 100
湯沢雍彦・宮本みち子『新版 データで読む家族問題』2008 年 日本放送出版協会 p.101
池田祥子 「短大—ジェンダーと階層によるランクづけを超える」 巨大情報システムを考える会編 『グローバル化のなかの大学—根源からの問い』 2000 年 社会評論社 p.71
- (3) 小山静子『戦後教育のジェンダー秩序』2009 年 勁草書房 pp. 156-158
- (4) 文部科学省 平成 21 年度学校基本調査速報 調査結果の要旨
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08121201/1282588.htm 2010/06/15 閲覧
- (5) 金沢大学男女共同参画キャリアデザインラボラトリー 『金沢大学 男女共同参画キャリアデザインラボラトリー報告書 平成 21 年度』 2010 年 3 月 pp. 199-201